

E. M. フォースターの『インドへの道』

彼の微妙な不決断¹⁾

林 田 鶴 子

序

E. M. フォースターの最後の小説『インドへの道』をこれより一作前の『ハワーズ・エンド』との対比に於て読む時、この小説の性格、あるいは作家の態度の変化がより一層明確になる。『ハワーズ・エンド』は「ただ結合せよ…」(Only connect…)をその副題に持ち、作品はその宣言への達成へと動いている。副題が示す魂の救済や救う者と救われる者との結合のテーマは、初期の小説から引き続いて語られているが、それが明示されたのは『ハワーズ・エンド』に於てである。「ただ結合せよ」という定理に支配されている小説の結末は、同じハッピー・エンドでも『眺めのある部屋』の全く自然で無理のない結末とは異なり、予期しない、ただ筋に收拾をつけ、題を正当化するためのものになっている²⁾。それと比べればこの『インドへの道』の「予言」(Prophecy)³⁾即ち作者の声は異質なものである。この事はその結末が『ハワーズ・エンド』のように、rounding off しておらず、opening out⁴⁾ していることからわかる。しかし、マーガレットの、あるいは作者の次の言葉が示すように、小説は決して単純に楽観的なものではない。

…真実、それは生きているから、物事の中途ではなかった。それは両領域からの絶え間ない努力によってのみ見い出されるものであった。そして調和は最後の奥義であるが、それを物事の始めに信奉することは無益さを受け合うことになる⁵⁾。

『インドへの道』はこの最後の奥義よりも、それに到る間に払われる努力の方

を重んじる作者の声を拡大し、深めたもので、ここでは誰も結合することが許されず、この決定的な悲惨な状況の下で人間が各様に反応するのを見るだけである。しかもその中で、結合、あるいは救済のテーマは数人の人間の救いではなく、一切の創造物にその対象が広げられ、「最後の奥義」の問題を小説の背後に抱えている。

この小説の表題「インドへの道」は作者自身指摘しているように⁶⁾、ウィットマンの詩集『草の葉』の一篇“インドへ航海せよ”に由来するものである。詩人はインドへの航海を、アメリカ横断鉄道とスエズ運河開通による現実的な世界一周の旅から、人間の心の帰省の如く理性の最後の楽園へと向う精神的な航海へと発展させ、その成功に依り

苛立つ子供達の心も安まり、
 全ての愛情は十分に報われ、秘密は語られ、
 全てのこの分離、間隙はとじ付けられ、留められ、結び合わされ、
 全地上、この冷酷で受動的な声なき大地は完全に正当化される⁷⁾。

このように神秘的で超自然的な対象に向う詩人の魂と、現実を越えた何物かを求めるフォースターとは類似する。しかし小説家が抱く偉大な願望は詩人のそれとは異なるために、彼は現実から完全に錨を上げ、「神の海」に向け出航することができない。彼は「愛、親愛な共和国」⁸⁾「ニュー・エルサレム、活気づけられた国家、浄化せられた教会」⁹⁾、ハワーズ・エンド邸宅、「調和」等々に対する願望と、あのマーガレットの発する警告にはさまれ躊躇している。彼には詩人のように何のためらいもなく、歓喜に酔って物質文明、理性主義を代表する食物、書物を捨て、全くの精神の世界に赴くことができず、その結末を、マーガレットの犠牲を払われて勝ち取られたハワーズ・エンド邸とは異なり、ハワーズ・エンドの延長であるインドをここでは誰のものでもないものに、簡単にいえば悲劇的に終らせている。それは彼が以前のような安易な解決に走らず、彼の非ウィットマン的性格を熟視し、彼自身の態度、姿勢を何の無理もせず提示した事を示す。『インドへの道』に於けるフォースターは、彼の内

面の「インド」が彼にとって「幻想なのか悪夢なのか」(vision or nightmare?)の不決断を終始表明している¹⁰⁾。その彼の不決断をこの作品の登場人物を通して考察探究するのがこの論文の主旨である。

種々の観点からみた「インドへの道」

ここでは登場人物を 1. インド在住のイギリス官吏とその妻 (アングロ・インディアン), 2. アデラ嬢とフィールディング, 3. ムア夫人, 4. ゴッドボウル, 5. アジズの5組に分けることにする。

1. 東洋の病理学, Oriental Pathology

作者が断固たる態度を示すのはこの最初のグループに対してだけであり、象徴の意味での「インド」と、現実の意味での「インド」¹¹⁾への道に対する彼等の逆姿勢を容赦なく非難する。イギリス官吏の態度は、地方判事ロニー・ヒースロップの「我々は愛想よく振舞うためにインドへ来たのではない。…我々は正義を行ない、平和を維持するために来たのだ」(p. 39)という言葉が示すように、彼等は「白人の責務」(the white man's burden)の名の下に支配者の立場を固守し、インド人は彼等にとって別の国民ではなく単なる被支配者に過ぎない。彼等の中の収税官タートン氏はイギリス人とインド人の関係について「交際は結構、礼儀はどんな場合でも守らねばならない、しかし親密になることは断じて許されない」(141)という規準を設け、地方警察長官マックブライド氏は「緯度30度の南側に住むという理由だけでそこの住民は犯罪者だ」という「東洋の病理学」(189)を自ら考案し唱えている。

このようなイギリス官吏の非情な固定観念に支配されているインドは、しかしながらその根底をみると皮肉にも逆に彼等を流浪人にしている。彼等の居住地が乾いた見すばらしいインド人の住む町とは違い、緑の樹木に囲まれた「庭園の町」ではあるが、それは空中楼閣に過ぎず、「下等ではあるが決して死滅しない生物の形態」の如きインドの大地には根を下すことができない。彼等が

どれだけの歳月を費してインドを外的に支配しようと、インドでは科学的医療器具がいつの間にか錆つくように、彼等こそ拒否されているのである。彼等の無力さ、困難さの原因は、フォースターが英国人の基本的性格に数え上げている「パブリック・スクール的態度」¹²⁾に依るものとされ、それはアングロ・インディアン達の芸術に対する無智、五年生程度の精神的年齢、あるいはお互いの態度を画一させ、例えばフィールドディングやアデラのようにそこからはみ出る者を、「弱者」とか「壊れた機械」とか呼ぶ「団体精神」等を通して「インド」に対する彼等の決定的な限界を描いている。彼等には結局「浜の砂の如き多種多様である人間」「豊かで靈妙不可思議な世界」が理解できず、「インドへの道」は彼等の前で完全に封鎖されている。しかし彼等の態度が「インドに関する最後の言葉でない」とムア夫人がヒースロップに反撥するように、希望は残されている。

2. 合理主義の敗北, Failure of Rationalism

フィールドディングの信じるところに依れば、世界とはお互いに近づこうと努力する人間の場で、それは善意と教養と知性の助けで一番スムーズに達成され得る——これはチャンドラポアには適さない信条であるが、それを捨てるには年を取り過ぎていた(50)

上記の描写はフィールドディングを的確に描き出し、彼のこの小説に於ける発展と限界をすでに示している。善意が彼に発展を、教養と知性が限界を与える。それは彼とインド人アジズとの交友、発展、挫折の展開の中で明らかになる。彼は他のイギリス人と異なり、教育者としてイギリス人とインド人を同等に扱おうと努力し、丘の上ではなく町の大学の官舎に住み、この内的、外的面の自由さからアジズとの交友も何の障害もなく始められる。しかしそれは彼の生まれた国イギリスの、広くいえばヨーロッパの教養と知性の範囲内という限界を伴ってである。

彼とアジズとの交友によって、前後に置かれた二枚の鏡がその間に立つ人

物のそれまで目の届かなかった部分まで映し出すように、作者は二人の人物をお互いに反射させて広く深く描いている。フィールディングは人間関係に教養、知性ではなく、心と心の信頼、触れ合いを願うアジズのように「感情の勢いに身を任せたい」と願うが、彼にはそれが出来ず、アジズの感情の爆発を「異様」だとか「不当」だとかしか理解できない。それはフィールディングが感情を「水が桶からこぼれる」ようなものではなく、「ジャガイモのように計量できる」¹³⁾ものだと教えられてきた西洋的感情表現に依る。フォースターはアジズの方に人間関係に於てより可能性があるとしながらも、彼自身現実的にはフィールディングの側に立たざるを得ないように¹⁴⁾、フィールディングが英国への帰路船上から地中海を眺めた時のあの狂喜の叫びを彼とインド、あるいは彼とインド人との間隙として西洋人フィールディングの最終的な姿を描き出している。

地中海は人間の規準である。人はその素晴らしい湖を離れ、(インドの)怪奇さ、異様さに近づく、しかし再び帰路につくと、永久に死んでしまったかと思っていた優しいロマンティックな空想が6月のキンボウゲや雛菊を見た時花開く。(246)

作者はフィールディングが東洋の「怪奇さと異様さ」より西洋の「優しいロマンティックな幻想」に帰るのを邪魔しない。むしろそれはフォースター自身の姿であると思われる。しかしフィールディングは、イギリスに帰される以前に彼の生活の基盤を揺り動かされるような経験をしなければならない。彼がある夕方マラバールの丘が突然夕闇に隠れ、それと同時に丘が暗闇の至る所に存在するかのように感じた瞬間、それが果して本当に経験されたのかどうか疑わしくなる。この奇妙な体験は、後で一般化されて述べられているように「人間存在は自律的ではなく、他律的である」(217)という不安定な人間存在の意味を彼に問い直し、丘の存在を問うように彼自身のそれまでの人生を顧みさせる。この体験に対して西洋の合理主義は明確な解答を与えることができない。ただ経験している時にしか理解されない概念、別の箇所で「イギリスとヨーロ

ッパで学んだこと全てが彼の助けとなり、それらは彼を明晰さへと導いたが、明晰さが彼に何か他の事を経験させる支障となった」(99)と述べられているその「他の事」こそフォスターがインドで見い出そうとしたものである。しかしフィールドィングは「北」と「東」との融合を達成するには「北」に長く居過ぎた。彼は結局先の引用に述べられている彼の限界を越えることができなかつたのである。その限界とは理性による判断を第一に考える西洋の合理主義であり、それはまた彼を無神論者に行しているものである。

「私は本当のインドが見たい」(16)の言葉と共に小説に姿を現わすアデラはもう一人の合理主義者である。マラバアルの丘がフィールドィングに新しい経験を与えたように、彼女の場合も丘は重要な役割を演ずる。それはアジズの計画したマラバアル洞穴へのピクニックで最高潮に達するが、それよりずっと以前に作者は彼女と丘との関係を示唆している。それはブリッジ・パーティーで彼女が独りサボテンの垣根から丘を眺めている時で、作者はもう少し日没が長く続けば丘の影が町に届くのだがと述べ、少し後では丘が町に居る彼女に届かないことを繰り返している。

しかし彼女は丘に触れることはできなかった。彼女の結婚生活の幻想が丘の正面にシャッターのようにおりた。彼女とロニィはこのように毎晩クラブに顔を出し... その間に本当のインドが誰にも顧みられず側を通り過ぎて行く... 彼女はインドを精神としてではなく、装飾帯としてみるだろう(37)

これらはインドの一面である丘の象徴的性格を描くと同時に、「本当のインド」を見たいアデラが彼女の非難するイギリス官吏ロニィとの結婚によってそれを妨げられていることを示している。

マラバアル洞穴へのピクニックは、彼女の問題を打開に導き、彼女を丘に触れさせようとする試みである。丘に近づくに従い周囲の空気は、「声が反響もせず、考えが発展もしない」即ち、人間の理性は何の役にも立たない新しい「精神的沈黙」の性格を帯びてくる。そんな状況の中にあっては彼女の見たも

のが「小枝」なのか「蛇」なのか区別できず、科学の産物である「双眼鏡」¹⁵⁾で「小枝」だと判定したアデラが肉眼で「蛇」だと主張するインド人に負けてしまう。またこの異様な雰囲気の中で彼女は結局ヒースロップを愛していなかったことを知らされ、その瞬間「彼女は頼みの綱が切れた登山家」のように感じ、丘に触れるのを邪魔していたシャッターが取り除かれたように思われるが、すぐにそれは元通りに丘の正面を覆い、彼女は愛が無くとも結婚は成功すると自分に言い聞かせる。この彼女の足場を一瞬揺がただけですぐに治まったようにみえる混乱は、それに引き続いて起るアジズを暴行の廉で起訴する事件によって実質的には持ち越されるのである。またそれは彼女が洞穴で聞いた反響となって直接的に彼女を悩まし苦しめる。反響と訴訟は一体となって、彼女にヒースロップとの愛のない関係を認めさせる方向へと彼女を導く。

アデラは裁判の後、即ち、本当の感情を認めた後、フィールディングが再評価するように「人生を吟味したり、吟味されたりしない本当の人間」(212)になるが、それは彼自身のように自己の限界を知る人間になっただけで、彼女の願う「本当のインド」には未だ到底及ばない。アデラとフィールディングが裁判の後、急速に親しくなるのは二人の「インド」に対する態度の類似、即ち合理主義的の接近に依る。彼等は感覚的、直観的判断より理性による理解を信じ、困惑され、不安定になる危険を避けるため理性を越えた問題からは身を引かざるを得ない。例えば「死」に関して、フィールディングが「人間は死ぬ」と余り考え過ぎると自殺したくなるから考えない方が賢明だといえ、アデラもまた彼の意見に同意する。現実だけを生きようとする二人には精神の混乱はないが、それと引き替えに「何か他のもの」「列車の伝言」は伝えられることはない。作者の二人に対する態度は次の引用にはっきりしている。

「私はもう少し生きていたい」とか「私は神を信じない」の点で二人の意見が一致した時、宇宙が小さい空間を埋めるために少し身体を動かしたかのように、あるいは彼等が自分達の仕種を遥かな高みから眺めているかのように、その言葉のすぐ後で奇妙な余波が起った。…彼等は自分達が間

違っていると思うことはできなかつた、というのは正直な人が自分は正しくないと考えるや否や彼等は不安定になるからである。星の彼方にある計り知れないほど遠い目的地は彼等のためのものではなかつたし、彼等もそれを探そうとはしなかつた。しかし今、他の場合のように、もの足り無さが二人の心を襲った。夢の影の影が彼等の鮮明な関心に降りかかった、そして二度と見ることもないその影こそ別の世界からの伝言のように思われた。(230)

フォースターは彼等が「別の世界」を見、そこから伝言を受けることが出来ないのを嘆き、二人を「間違っている」と判断するが、その半面そのように断定できない面もあるように思われる。何故なら、二人が恐れる精神の不安定こそムア夫人を最後には死へと追いやったものだからである。

3. 二重の幻想の黄昏, Twilight of the Double Vision

ムア夫人は息子ヒースロップにアデラを引き合わせる目的でインドに来て、そこで登場人物の中で一番困難な「インドへの道」を歩く運命となる。その発端となるのはマラバール洞穴へのピクニックである。

洞穴はその異様な性格で特徴づけられ、その重要な役割を期待させるよう作品の冒頭で強い印象を我々に与えている¹⁶⁾。「異様さ」の内容はピクニックの当日まで誰にも明かされないが、ヒンズー教徒ゴッドボウルを通してアジズとの会話や、彼の歌う宗教歌に暗示されている¹⁷⁾。彼女は洞穴内の暑さと人波の息苦しさの中で誰かに触られ、彼女の平素の落ち着きを失い、取り乱してしまう。犯人を捜し出そうと洞穴の入口で待ち受けるが、悪意のある人物は居そうにないとわかり、また触れたのは母親に背負われた幼児であったと判断し安心する。彼女に触れた正体は判明し、洞穴での恐い経験は解決されたかにみえるが、その肉体的恐怖より更にその正体が未定のまま彼女を苦しめるのは、「人込みと悪臭だけが彼女を驚かしたのではなく、恐い反響があった」(126)と述べられている「反響」である。それはすぐに意味内容を付与され、ムア夫人の内面生活と密接に関係付けられていく。

「ボーン」が人間のアルファベットで表記され得る反響の音である。…希望、親切、鼻をかむ音、長靴の耳障りな音、それら全てが「ボーン」になってしまう (127)

もし人がそこで下劣な言葉を発しても、あるいは高尚な詩を引用したとしても、それらに対する反応は「ボーン」である。(128)

しかし突如彼女の心の隅に宗教が顔を出した、あの哀れで小さいおしゃべりのキリスト教が。彼女は「光あれ」から「全て終わった」までの尊い言葉もただの「ボーン」に帰してしまうのを知った。それから彼女はいつもより広大な領域、彼女の知性では到底理解できない宇宙に恐れを抱いて、彼女の魂は安らぎをなくした。(129)

彼女を「精神的混乱」に陥れたのは「彼女の理性では理解されることのない宇宙」を見たからであり、その宇宙が実際どういうものかは小説の所々に説明されている。

それはゴッドボウルの歌うクリシュナの、人間の切なる呼び掛けにもかかわらず返答しない神の姿であり、また善と悪の相異は神が存在するか否かにあり、悪といえども決して神の非存在ではないから、人間は神に向って「来たれ、来たれ」と呼び掛けなければならないとするヒンズー教の約束の世界ではなく、単なる訴えに過ぎない世界である。またそれはピクニックの途中彼女の経験した、ロマンティックでもなければ、どうにも手の施しようがなく、何の驚異も与えないインドの夜明けが代表する冷酷なインドの自然でもある。これら全てはフィールディングやアデラは勿論、「インドを精神として見ている」とアデラが評するムア夫人をも戸惑わせ、混乱に導く。それは「インドは…、ああ、何と恐ろしい考えでしょう」(56)と、フィールディングの「インドは混乱です」という言葉に驚愕するムア夫人の言葉が示すように、彼女には混乱を混乱として受け入れ、洞穴の反響が恐らく彼には影響を与えなかったであろうと作者が推定しているゴッドボウルのような精神的混乱に対する心構えが欠けていたからである¹⁸⁾。その彼女に彼女の熟知するアーチ、即ち彼女の世界の一步

外側には別のアーチがあることを知らせる。この新しい経験に対し、彼女はフィールディングやアデラのように再び彼等自身の理解範囲内に引き返すこともできず、「恐怖で身動きも取れず」その場に坐ってしまう。

彼女は宇宙の恐怖とその卑少さが同時に見える状態——多くの老人が巻き込まれる二重の幻想の黄昏——に達した... 二重の幻想の黄昏の中ではそれに対しどんな大げさな言葉も見つからないような精神的混乱が起り、我々は行動することも行為から身を引くこともできず、また永遠を無視することも尊敬することもできなくなる。(180)

彼女がインドによって与えられたのはこの「二重の幻想の黄昏」、即ち精神の沈澱であり停滞である。彼女の信条である「善意」もその反対の「悪意」と同じ「ボーン」に帰してしまい、彼女は行動の動機を失ない、外界に対して不能者になる。この混乱に陥った人の運命がどうなるかは死が彼女に解答を与えているとおりでである。前にも後にも身動きの取れない精神状態が最後に行き着くところは、死か狂気のいずれかであり、ムア夫人の死は彼女の敗北を、「インドへの道」での挫折を象徴するものである。しかし、彼女の死がただそれだけでないことも確かである。

彼女は死んだ——船が南向きの航路をとっている時に海中深く葬られた、というのはボンベイを出航した船はアラビアを回り切るまでヨーロッパに船首を向けないからである。... 幽霊が紅海まで船の後に付いてきたが、地中海には入ることができなかった。スエズあたりで社会的変化が起る。アジア的要素が弱まりヨーロッパ的なものが強く感じられ、この変り目でムア夫人は船から追放された。(222)

彼女が自分に精神的混乱を与えたアジアで死んだこと、彼女が帰りがっていたヨーロッパには入ることができなかったこと、これは彼女の敗北と同時に逆説的な勝利を意味するものである。アジズに「あなたは東洋人だ」といわれ、アデラからは「インドを精神としてみている」と評されるムア夫人が彼女の予期に反してではあるがインド洋に水葬される結果となったのは、「インド」

が彼女をヨーロッパに帰すのを拒んだからだとみななければならない。彼女はイギリスに re-turn する途中インドに turn したのである。それは未だ彼女の死を知らないアジズを裁く法廷に、アジズの無罪を信じるムア夫人の気配が漲り、その気配がアダラの判断を正しいものに導いた力になっていることに示され、更には彼女がインドの神「エスミス・エスマア」Esmis Es Moore にされ祭り上げられることに具体化されている。彼女の逆説的勝利はともかく、彼女の「インドへの道」はあの黄昏で停止してしまっただのである。

4. 「来たれ、来たれ、来たれ、来たれ」 Come, come, come, come.

「インドへの道」はムア夫人の挫折した地点で停止したのではなく、彼女の前方にヒンズー教徒ゴッドボウルとイスラム教徒アジズがいる。

ナラヤン・ゴッドボウルは登場人物の中で一番神秘的であり、彼の心の奥に何があるのかは誰も知ることができない。フィールディングに招待されたお茶の集りで宗教に関する話題を提供するよう期待されているにもかかわらず、彼は「手を見ることもせず、ただ微笑しながら食べ続ける」(59) この彼の期待外れの行動が彼を一層神秘的にする半面、同じ集まりの席での彼の宗教歌やアジズの訴訟に関して述べる善悪の問題になると彼は急に小説の重要な鍵を握る解説者になる。シュリ・クリシュナの非情な拒絶、善と悪は共に神の一面であると教えるヒンズー教は、ムア夫人やフィールディング等の知性では理解不可能な事柄である。理解困難なものがいつも高級なものとは限らないが、この場合は明らかにより広い世界を代表するものとしてヒンズー教が扱われており、それは小説の第三章「寺院」に於て明白になる。

人間の呼び掛けを拒否する「存在し、存在しなかった、存在しない、存在した」(247) ヒンズー教の神はその誕生によって初めて人間に到来する。

悲しみは全て消滅した。ただインド人のためだけではなく、外国人、鳥、洞穴、鉄道、それに星のためにも、全ては歓喜に、笑いになった。病弊も

疑惑も、誤解も残酷さも恐怖も存在しなかった。(251)

クリシュナ誕生の儀式の間、寺院は正に神の国になり、森羅万象が神の恩恵に浴し、キリスト教が拒否した「楽しみ」とか「悪ふざけ」さえも認められる。フォースターはヒンズー教のこの寛容は神と人間の断絶を埋めるものであるとし、キリスト教と比べ批評している¹⁹⁾。しかしまた、寺院の中で「本当のインドと呼ばれることもある」と作者が述べている農民達が神の誕生の狂喜に酔い騒ぐ姿を眺めると、次のような反応を示す。

それ（未知なるもの）自体以外にどのように表現され得るのか... もし人が望めば彼は神と共にいたと考えてもよいが、そう考えるや否や、それは歴史となり時の法則に支配されてしまう。(251)

神と人間の間隙をなくそうと努めている宗教に好意を示しながらも、その間隙が全て埋め尽されることは耐えられない。この作者の懐疑的態度はゴッドボウルの取り扱い方にみられ得る²⁰⁾。それは彼さえも「インドへの道」の途上に置かれている事実である。

聖歌隊の指揮者を務めていたゴッドボウルは教徒と同じ宗教的雰囲気鼓舞され、大胆にも神の無限の愛を模倣しようとする。ムア夫人、それに「スズメバチ」²¹⁾までは首尾よく行ったが、次に「石」を試みようとした時彼は次のように叫んで後ずさりする。

だめだ、彼は成功しなかった。石を試みることは間違っていた。論理と意識的努力が迷わしたのだ。(250)

彼は人を酔わせる音楽に導かれ、神の愛を真似、神と一致しようとする神秘的経験に入るが、人間特有の「論理と意識的努力」に邪魔され失敗する。しかしすぐ後で今度は「論理と意識的努力」に依って彼の採るべき立場を再確認する。

神の位置に自分を置き、彼女（ムア夫人）を愛し、彼女の位置に自分を置

き、神に「来たれ、来たれ」と呼び求めることは彼の願いであると同時に義務でもあった。これが彼にできる全てであった。何とわずかのことか。…「それは多いとは思えないが、しかし自分自身よりは多い」と彼は考えた。(254)

この彼の姿はフォースターに理解できるヒンズー教徒の姿であり、ヒンズー教が他の宗教より「インドへの道」への可能性があるとしても、それは余りにも彼の受容範囲を越えたものを要求する。その儀式は「混乱、理性と形式の挫折」(248)であり、「上品さ」を犠牲にしていると、審美学的見地から拒否反応を示す²²⁾。

作者は「インドへの道」の困難さを充分説得しているが、ただその事を強調するだけではなく、「インド」が何処かにあることをも繰り返し暗示する。例えば次に掲げる箇所等、

(空の色は変化するが)しかし空の中心は夜でも存続する。(2)

空の向うに全ての空に橋を掛けるそれらよりずっと公平な何かがなければならぬのではないか。その向うにもまた…(30)

そのアーチの向うにいつも別のアーチがあるように思えた。最後の反響の向うには沈黙が。(41)

…新しい気配が生じた、耳よりも更に多くの感覚に入り込む精神的静寂さが。(120)

それではあなた(ムア夫人)は反響をインドだと思ったのですね。あなたはマラバール洞穴を最終的なものだと思ったのですね。(182)

洞穴より遙か彼方にある何か美しいもの(272)

「本当のインド」は確かに存在する。即ち宇宙の主、無限の愛、世界の願い、発展を必要としない何か美しいもの、理解を越えた平和、完全な円。これらは詩人ウイットマンの願い、目ざす「神の海」である。しかしフォースターは詩人のようにそれに真しぐらに向うことはできない。何故なら「宗教には真実で

ないかもしれない何かがあるが、未だそれは歌われていない」とフィールディングが暗示するように「真実でないかもしれないもの」即ち誰も個人的に経験する以外には他人に伝えることの不可能な神秘的状態に於ける神との一致がフォスターには「幻想なのか悪夢なのか」断定することができないからである。これは信仰のない者の口実であるかもしれないが、しかしこれこそフォスター自身の態度なのである。

5. 友、未だだ、そこではだめだ、The Friend; Not yet, not there.

イスラム教徒アジズは「インドへの道」を二重の意味で歩いている人物である。その一つである独立するインドに向う彼の道は、イギリスに支配されている現状に対する彼の反応の変化を追うことによって容易に明らかにできる。

彼にとってインドは生れ故郷ではあるが、それが外国に支配されている現在、彼の祖国であり、栄華を誇り何よりも統一されていたイスラムの世界を郷愁する思いが彼には強い。この後向きの姿勢は当然彼にインドを外国視させ、被支配者意識から遠ざける。しかしアデラの訴訟事件は彼女とアジズの個人的問題からインドとイギリスの民族闘争にまで発展し、彼を嫌でも応でもインド人の列に加えさせ、彼自身も以前のインドに対する曖昧な気持から明確で現実的な愛国心を抱くようになる。詩人でもある彼は「イスラムの崩壊」「愛のはかなさ」とは違う「新しい歌」の必要性を感じる。

彼は大衆に歓呼して迎えられ、畑でも歌われる新しい歌を作りたかった。
 …それが唯一の健全な道なのだ。この場所、この時代に、コルドバやサマルカンドの栄光が一体何の助けになるというのか。それは過ぎ去ったのだ。(233)

彼は遂に「漠然として大きな母国の姿」をインドに認め、その母国が外国の支配を受けている国民の一人としての自覚を持つようになる。そこに到って彼の願うインド統一は過去の再現ではなく、支配されている国から独立の国へと生まれ変わることであり、彼の「インドへの道」はここに漸く始まることにな

る。彼は「私はやっと今インド人になった」と意志表示し、それ以後はインド人としての政治意識、即ち対英感情を激化させる。この変化と平行して、最初は敵意を感じていたインドの大地にも、また対立的であったヒンズー教にも親近感を持つようになる。この彼の変化を作者が「健全な道」と呼んでいるのは、アジズの建設的態度を是認するからである。

フィールディングは自分の捜し求めるべき対象が見つからない時悲しくなり、ゴッドボウルは自分に出来ることは神への呼び掛けだけだと知った時不十分だと感じる。この「悲しい」とか「不十分」とかの感情は人が自分より偉大な何かに遭遇した時感じるものである。作者はゴッドボウルの悲しみをフィールディングのそれより一段と認識度が高いものとしているが、ヒンズー教徒の関与する対象が「宇宙」とか神への嘆願で、作者の重んじる個人とか人間関係ではないことがゴッドボウルを判断する時フォースターを戸惑わせる点である。

そこで彼はゴッドボウルよりも穏健であるが決して受動的ではない「インドへの道」をアジズの中に模索している²³⁾。

その詩は誰にも何の利益も与えなかった... クリシュナへの呼び掛けより明白ではないがそれでも詩は人間の寂しさ、孤独、決して来ないが未だ完全に見放された訳でもない友の必要性を歌った。(69)

ゴッドボウルの宗教的「インドへの道」に比べ、これは審美的接近であり、前者が初めから神を意識しているのに反して後者は必然的なものとして神をみている。後者は人間性を強く主張し、それは「友」が「神のペルシャ的表現」と同時に人間の友をも意味するからである。フォースターは神と友の二重の意味で「The Friend」を使用している。

彼の第一の友は彼の心の家である回教寺院で出会ったムア夫人である。二人の間に生じる友情は一度結ばれたら決して破られることのない永遠不変の関係であり、彼女はアジズの理想像となる。彼の信頼は相互の接触と努力を必要とする普通の友情を越え、絶対的なものとなり、果ては彼の意見の規準とさえ

なる。これが人間関係の理想的姿としても、全ての人間が完全な友情で結ばれれば、フォスターは人間関係の重要性を云々する必要もなくなる。ムア夫人を神秘化することによってそれを可能にしているが、二人の友情はあくまで理想であって現実ではない。

アジズとムア夫人の半神秘的友情と平行して、常にお互いの理解と接触を必要とする普通の友情が彼とフィールディングの間に展開する。彼等の関係はすでにみてきたように数々の障害に会い、それを克服することが出来ず失敗に終る。もしこの二人の友情が成功すれば、それこそフォスターの理想が現実となるのである。不成功の原因がアジズよりフィールディングの側にあるとされるのはアジズの心が相手より成長していることに依る²⁴⁾。第二章で決裂した二人の友情は第三章でその主因だった誤解が解けて再出発しそうにみえるが、その時には二人の心に潜在していた国民意識が前線に現われ反撻し合う。アジズはインド人としてアングロ・インディアンのフィールディングに向って叫ぶ。

イギリス人なんかやっつけろ。お前達なんか即座に掃き出せと云っているのだ。いまましいイギリス人を一人残らず海にほうり投げてやろう。それが済んだら、その時君と私は友達になれる。(282)

この段階で二人の友情は政治と個人の両面を備えた性格に発展し、その複雑で難解な関係が成功に終るか終らないかの間を発してこの小説は結末へと導かれている。結末に於て政治的及び精神的「インドへの道」が友情の可能性の問題に単一化されている。それに対する作者の判断は次のようである。

馬はそれを欲しなかった——お互いに向きを変えた。大地もそれを欲しなかった——乗り手が一列で進まなければならないように岩をつき出した。寺院も、貯水地も、牢獄も、宮殿も、鳥も腐肉も、迎賓館もそれを欲しなかった。それらは多数の声となって「いや、それは未だだ」と言い、空は「いや、そこではだめだ」と答えた。(282)

空以外、即ち地上のものは二人が友達になれるのは「まだだ」と現在のところ

は否定しているが、将来のいつかにはその可能性があるとしている。しかし地上以外、即ちあの世のものは「地上ではだめだ」とその可能性を断固として否定している。この二種類の答えは本質的に異なるもので、片方が人間の声であるとすれば、他方は神の声である。空の決定的な否定は本当の友情、即ち「インド」が誰のものでもないことをその短い言葉で最後に断言している。しかしその否定は空の立場で考えれば絶対的な肯定となる。何故ならそれは空での友情の可能性を暗示しているからである。空の答えを否定として、あるいは肯定としてみるかは我々各人が空を、あるいは神を信じるか否かに依る。フォースターは我々が今まで小説の人物を通して考察してきたように、空のような白黒明瞭な答えを出すことができず、戸惑い、口ごもっている。彼は何の懷疑もなく、それどころか偉大な希望を持って「神の海」に向う詩人ウィットマンではない。

結 論

以上みてきたように、フォースターは最後の小説で彼の理想を「インド」に託し、それへの過程を登場人物によって描き出している。そのテーマが「インド」という目的ではなく、「インドへの道」という過程であることがこの小説の重要な点であり、これが『ハワーズ・エンド』の結末のための結末から免れさせている理由でもある。理想は勝ち得たけれど、それを小躍りして喜ぶには余りにも払われた犠牲が大き過ぎたとの非難を残さずに小説が終っている理由でもある。それはまた、この小説の題名が借りられた神秘主義者ウィットマンの詩と大いに異なることを示すものである。フォースターは詩人のように「インドへ航海せよ」と積極的に唱えることは到底できない。それは彼の不信心に依るものだとして簡単に決め付けることができないのは小説にみられる彼の「インド」への願望を読み取れば明らかなことである。

注

- 1) 本稿は1970年1月に提出した修士論文を要約、補筆したものである。

- 2) David Shusterman, *The Quest for Certitude in E. M. Forster's Fiction* (Indian Univ. Press, 1965), pp. 158-9.
彼は『ハワーズ・エンド』を傑作とする Trilling と異なり、その機械的結末故に “almost great, but not quite” と評している。
- 3) フォースターの小説論 *Aspects of the Novel* で彼は小説の一要素としてこの Prophecy を取り上げている。
- 4) Forster, *Aspects of the Novel* (London: Arnold, 1963), p. 155.
小説の結末がいかになるべきかを論じ、彼は次のように述べている。
“Expansion. That is the idea the novelist must cling to. Not completion. Not rounding off but opening out.”
- 5) Forster, *Howards End* (London: Arnold, 1965), p. 206.
- 6) Forster, *A Passage to India* (Dent: London) の Author's Notes で述べている。
- 7) Walt Witman, “Passage to India”, *Leaves of Grass* (London: Dent, 1968), ll. 107-110.
- 8) Forster, “What I Believe” (1939), *Two Cheers for Democracy*, p. 79.
彼はそれによって理想の社会形体を意味している。
- 9) Forster, “Our Diversions: 7. My Own Centenary”, *Abinger Harvest* (London: Arnold, 1965), p. 76.
- 10) See. Rex Warner, *E. M. Forster* (London: Longmans, 1968), pp. 26-7.
- 11) See. David Shusterman, “The Curious Case of Professor Gadbole: A *Passage to India* Re-examined”, *PMLA*, LXXVI (1961), p. 428.
- 12) Forster, “Notes on the English Character”, *Abinger Harvest*, pp. 11-24.
- 13) *Ibid.*, p. 14.
- 14) *Ibid.*, p. 14.
- 15) Boyle, Ted E., “Adela Quested's Delusion: The Failure of Rationalism in *A Passage to India*”, *College English*, XXVI, 478-480.
- 16) 小説は次のように始まっている。
‘Except for the Marabar Caves—and they are twenty miles off—the city of Chandrapore presents nothing extraordinary’.
- 17) Reuben Arthur Brower, “The Twilight of the Double Vision”, *The Field of Light* (N. Y.: Oxford Univ. Press, 1962), p. 91.
- 18) James McConkey はムア夫人とゴッドボウルの「愛」の広さを比べ ‘Godbole's ... is the only kind of love which can survive in the world that Forster depicts’ と述べている。

- McConkey, James, *The Novel of E. M. Forster*, (Ithaca, N. Y.: Cornell Univ. Press, 1962), p. 144.
- 19) Cf. "Gokul Ashtami", Forster, *The Hill of Devi*.
- 20) ゴッドボウルの恐らくモデルであり、彼より神秘的で神の一致を経験できる H. H. の描写と比較すればよい。"Gokul Ashtami".
- 21) フォースターは「スズメバチ」を三回使用しているが、それは Allen が指摘するように「危険な生物」としてではなく、高等動物の下位に位置する昆虫としてであり、「石」は無生物の代表として扱われている。
See. Glen O. Allen, "Structure, Symbol, and Theme in E. M. Forster's *A Passage to India*", *PMLA*, LXX, p. 939.
- 22) フォースターは *The Hill of Devi* でヒンズー教に於ける美意識の欠如を繰り返し述べ、それに戸惑っている。例えば "there is no dignity, no taste, no form, and though I thought I am dressed as a Hindu, I shall never become one." p. 107. また別の所では "... the Hindu character—that it is unaesthetic. One is starved by the absence of beauty" (87) とも述べている。
- 23) Allen, "Structure, Symbol, and Theme in E. M. Forster's *A Passage to India*", p. 954.
- 24) アジズとフォースターの尊敬すると思える Emperor Babur を比較すると、類似点が数多く見い出される。Forster, "The Emperor Babur", *Abinger Harvest* また developed heart と undeveloped heart とに関しては "Notes on the English Character" を参照せよ。